

称号及び氏名	博士（言語文化学）	趙 楊
学位授与の日付	平成26年3月31日	
論文名	中島敦作品研究——戦時下の軌跡研究	
論文審査委員	主 査	山崎 正純
	副 査	田中 宗博
	副 査	山東 功

要旨

本論文は、中島敦の作品を同時代の歴史的文脈に置き精読することで、そのテキストに顕れた中島の時代認識と社会批判的思考を明らかにしたものである。以下、各章の概略を記す。

第一章「朝鮮体験と植民地認識——『虎狩』論」では、植民地における言葉の問題と、虎狩の持つ象徴的意味、宗主国側民衆の植民地認識という面から作品の解釈を試みた。

同時代の虎狩事情を調べた結果、かつて正月に行われる朝鮮の両班貴族の特権的な慣習である虎狩が、日韓併合後、日本人の富裕層が行う行事として文化的価値が大きく変容し、新聞に報道されるなど宗主国日本の権威を象徴する一種の記号となっていたことが明らかになった。さらに併合後の土地開発による自然環境の変化によって、虎の餌になる小動物が急速に減少し、それが自然の虎退治になったことも明らかになった。要するに日本統治下の朝鮮で行われる虎狩が朝鮮の伝統的文化の衰退を暗示しているのだ。

日本人少年の「私」が趙大煥に誘われて経験した虎狩は、趙大煥親子が朝鮮の伝統貴族から帝国日本の臣民に転落した軌跡の象徴にほかならないのである。一方、虎狩の場面で趙大煥が勢子を蹴る行為から趙大煥の「豪族の血」を感じ取り、宗主国日本の側に立つ「私」への強がりを見過ごした「私」の趙大煥に対する無理解は、後の趙大煥の失踪の遠因ともなっているのである。十数年後再会した二人の間の理解のすれ違いは、強いられた二重言語生活によって生じた趙大煥の、言葉における混乱を理解できない「私」の反応によく示されている。「虎狩」という作品で、宗主国人と植民地人之间にある理解の断絶は、言葉の次元の問題として描かれているのである。理解の断絶による徹底の拒絶——しかも拒絶する側に朝鮮人の趙大煥を位置づけることで、中島は宗主国側の人間の植民地認識の独善を鋭く指摘したのである。

第二章「記憶装置としての物語——『狐憑』論」では、「狐憑」を精読する作業を通じて、シ

シャクの語りが無文字社会における記録の役割を果たしたことを明らかにするとともに、シャクの死が為政者の長老による歴史・記録の操作の結果にほかならないと結論づけた。

シャクが讒言をいうようになったのは、弟のデッキが侵略者のウグリ族との戦いで死んで以来のことである。シャクのこの最初の「讒言」を「鎮魂の物語」と解釈する論者がいるが、「鎮魂の物語」は同時にウグリ族に襲われたネウリ部落の痛ましい記憶を内蔵していることにこそシャクの語りの本質があり、その語りの構造を解明する必要がある。つまり、シャクの「物語」は、一種の「記憶」であり、同時にまた「記録」でもある。後に「周囲の人間社会に材料を採ること」が次第に多くなったシャクの「物語」も、実は部落社会に起こる様々なことの記録になりつつある。未開の部落において、「集合的記憶の保持者」で「真実と所有の保証人」として社会に君臨するのは長老であり、「湖上民の最も平凡な一人」であるシャクに、部族の秘事を「記録」する権利はないはずである。シャクの死は、「物語る」・「記録する」という越権行為が招いた結果にほかならない。

第三章「政治への懐疑——『文字禍』論」では、「文字の解体」というモチーフに注目し、草稿との比較及び中島が影響を受けたと思われるヴァレリーの文章とを読み合わせることで、言葉によって構築された伝統や制度、すなわち政治が持つ「虚構の力」を暴く中島の意図を追究した。

文字の解体によってその意味が消失するように、あらゆる存在、乃至人間の日常の営み、あらゆる習慣に至るまで、「同じ奇体な分析病のために、全然今迄の意味を失つて」しまうという老博士のこの恐ろしい病気は一体何を意味しているのか。当時の雑誌『文学界』に掲載されたヴァレリーの文章との比較によってその疑問を解明した。

人間の「精神の産物」である「社会とか、法律とか、政治とかの世界」を「神話の世界」と述べるヴァレリーは、それらの世界で安住していくには、「人間の言葉」を信ずることが「絶対に必要なのである」と述べる。不思議な病気による紙の崩壊が「凡ての社会生活」を破壊していくという仮説は、言葉によって構築された伝統や制度が持つ「虚構の力」をよく物語っている。一方、文字の力を誰よりも分かっているはずの老博士は文字の力には服従せず、その「害」を暴くことに終始執着する。「奇体の分析病」によって生じた症状は結局老博士一人の世界の崩壊となって出現し、文字の「害」に「気付いて」いないニネベの人々は相変わらず彼らの世界で安住している。たとえ地震による圧死がなくても、懐疑の深淵に陥った老博士はもはや普通の社会生活ができない生ける屍にすぎないといえる。老博士の偶然の圧死を敢えて文字の霊の復讐のように描いたところに、中島の「組織、慣習、秩序」——すなわち政治への不信が描きこまれているのである。

第四章「〈父殺し〉の物語——『古俗』論」では、原典『春秋左氏伝』と詳細に照合した結果、崩壊と公子疾、叔孫豹と豎牛との歪んだ父子関係が問題として浮上し、両作品に共通している〈父

殺し)のモチーフが明らかになった。

中島の創作ノートに、「牛人」に描かれた、天井が下降してくる悪夢を思わせる一つの略図が残っている。上下二本の平行する直線の間「一寸」という言葉が書かれ、上の直線の両端にそれぞれ「父親」、「恐怖」という言葉が記されている。更に、上の線と垂直に下向きの「→」が描かれ、「天井」と表記される。下の線と垂直に上向きの「←」が描かれ、「政事的」と表記されている。

この略図で注目に値するのは、下降してくる天井を表す上の直線の両端に、それぞれ「父親」と「恐怖」という表示があること。もう一つは、「一寸」しかない空間を下から圧迫しようとする「政事的」なものである。両者の間に潰されそうになるのは、「父親」に対応する「息子」の存在だと思われる。

「父親」に「恐怖」を感じると同時に、「政事的」な何かに畏怖の感情を抱いている息子が、両者の間に圧迫され、潰されそうになる——このような解釈がもし可能であるなら、「牛人」乃至「盈虚」の〈父殺し〉のモチーフがさらに確実に見えてくる。

一九三七年三月、文部省が編纂した『国体の本義』において、天皇と国民の関係が「義は乃ち君臣、情は父子を兼ね」と述べられている。「支配者は、政治的支配服従の関係に家族間の心情を援用することによって、権力的支配によって生ずる抵抗を緩和しようとするばかりでなく、家族に対する感覚的情緒を国家への忠誠のために動員することによって、現象的には国民の自発性を自らの支柱にすることができた」という石田雄の指摘は、国が喧伝する家族国家観の戦時下の国民動員における働きをよく説明している。

日中戦争が泥沼化している背景の下で、徴兵され戦死した人々の存在は、国家原理と個人体験の背離のなか、屈服するのはあくまでも国民の側で、「父」側の国の原理は、絶対真理として個人の頭上にのしかかっていることをよく物語っている。創作ノートに父親と政事的なもの間にもがく息子の感じた天井が下降してくる恐怖が、『古俗』第二篇の結びのところで瀕死の父親の悪夢に転移する。そのような描写は、中島の意図した〈父殺し〉の顕現にほかならない。『古俗』は、国が鼓吹した「忠孝一本」へのアイロニーであり、「父」に象徴される国への反逆なのである。

第五章「越境できぬマリヤン——『マリヤン』論」では、語り手の「私」の視線に注目する一方、マリヤンの複雑な内面性に対する分析を行った。マリヤンの『ロティの結婚』に対する不満は何を意味しているのか。日本人の「私」にほのかな恋心を抱きながら、日本人との結婚にためらいを示した彼女の矛盾した態度は何のためなのか。そのような疑問を解明することで、「マリヤン」における植民地の「文明化」問題に対する中島の思考、及び主人公のマリヤンが持つ宗主国意識を、否定的に見る中島の姿勢が見てとれる。

第六章『『大東亜戦争』下の東洋精神——『弟子』論』では、「大東亜戦争」が勃発したあと再び古典を素材に書かれた「弟子」を「斗南先生」の加筆部分と読み合わせながら、手帳や書簡の記述も引用して、中島が〈東洋精神〉について肯定的に語り、戦争に対する思考にも変化が生じたことを論じた。

原典との比較作業から中島の意図した、〈精神〉至上主義者で「正義派」の子路像を明らかにするとともに、子路が壮烈な最期を以て、〈義〉という君子之道を〈精神〉と〈形〉との両方から完璧に貫徹したという結論に到達した。中島の手帳や書簡、及び同時期に書き加えられた、「斗南先生」における伯父の政治的主張への賛同を表す部分を参照すると、長期化していた日中戦争に対する疑念が「大東亜戦争」の開始によって解消できた中島の安堵の念が感じられる。すなわち、「東亜建設」の美名を掲げながら、東亜同士の中国と戦争を続けてきた日本は、ようやく米英を相手に戦争をはじめたことで、いわゆる「聖戦」の〈精神〉と〈形〉の一致を達成し、かつて疑念を抱いた人々を精神的に解放したわけである。中島は、その時代の知識人の精神を捉えた「一二月八日」の意味をよく理解していたのである。

第七章では「李陵」に見られる人間と歴史の関係に注目し、「大東亜戦争」の進行とともに喧伝されていた世界史における日本の主体性の問題や日中戦争の性質の追認問題を、中島がどの程度客観的に分析しているかを考察した。

李陵は「敗軍の責を償う」ため「単于の首」を狙いながら、「漢に聞える」ことにこだわり、結局実行できずに漢の裏切り者として悶々と余生を匈奴の地で送る運命となった。一方、「人に知られざることを憂へぬ」蘇武は節義を貫き、一九年ぶりに漢に帰還し、しかも、「その跡が今や天下に顕彰される」ことになった。歴史に残された「跡」とは、あくまで完遂できた行為である。そのような意味で、まだ戦争の最終的な行方がはっきりしていない間に盛んに日本の世界史における主体性や「大東亜戦争」の正当性を主張するのは性急の謗りを免れない。中島は「述べて作らぬ」方針を執った司馬遷に託して、自分が生きている時代と真正面から向き合い、社会の現状に対し、ありのままの憂慮の情を表したのである。

以上のように本論文は、中島敦の朝鮮植民地体験、パラオ体験、中国古典に題材をとった代表的作品群について、同時代の様々な資料にもとづき検証し、中島敦の時代への対峙とその姿勢の表現の実態とその意味、さらには同時代に生きる日本のナショナリティを背負った一人の国民としての社会認識を明らかにしたものである。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、中島敦の作品を同時代の様々な資料に基づき検証し、中島敦の戦時下における思考の軌跡を明らかにすることを目指したものである。言語文化学専攻が定める審査申請要件を十分に満たしており、十分にその学術的価値を認めることができる。以下、言語文化学専攻「博士論文審査基準」に定める五つの基準に照らしつつ、本論文の学術的成果として評価される点について具体的に述べることとしたい。

①研究テーマが絞り込まれている。

「中島敦作品研究——戦時下の軌跡」と題する本論文の中で論者は、中島敦の代表的な作品を初期作品から最晩年の作品まで年代順に捉え、一貫してそれらの読み直しと再評価を試みている。そのうえで、中島が文学者として活躍していた時期がほぼ昭和の戦争期と重なっていることに注目し、その作品に表現された中島の植民地認識、政治への疑問や歴史への思考など、戦時下を生き抜いた知識人の社会認識を追求している。したがって、研究テーマの一貫性を求める本専攻の審査基準第1項を十分に満たしていると判定する。

②研究の方法論が明確である。

本論文は、中島敦の作品の内部分析と外部検証を併用して作品を考察することをその方法論としている。具体的に言えば、当時の日本の植民地政策、国内政策、戦争関連の資料、中島の蔵書目録、日記、手帳、書簡などの一次資料も可能な限り分析の対象とすることで、作品内部の構造分析や技法の解明と併用しながら、従来の研究では捉えることができなかった問題点の所在を明示し、その解決を試みた。また、考察の対象となる作品を執筆年代順に選択・配列することで、中島の思考の軌跡を明晰に浮かび上がらせることに成功している。したがって、方法論的的確さを求める本専攻の審査基準第2項を十分に満たしていると判定する。

③先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

各作品の先行研究については、本論文の本文中および注において、詳細な言及が見られる。例えば、序章では、従来の「芸術的抵抗」説を詳細に検討したうえで、中島が作品を通じて同時代へコミットする姿勢を明らかにし、そのことの重要性を示すことができた。また、第一章「虎狩」論では、従来の研究における論点を整理したうえで、これまで無視されてきた主人公の出身や虎狩が持つ二重の意味を考察することの重要性を明確に示している。植民地における言葉の問題と、宗主国側民衆の植民地認識という二つの面からこの作品の特異性を明らかにするという氏の手法は、支配と被支配という二項対立図式によって、植民地の一般的な表象を描き出す従来の植民地文学論的方法的限界に十分意識的であることで獲得されたものといえる。第二章では言葉と歴史との関係を指摘した先行研究を踏まえながら、「狐憑」の独自の作品世界を分析し、無文字社

会における記録の問題を明らかにするとともに、「狐憑」が記録と権力との関係を表現した作品だという新たな読み方を提示し得ていると言える。このように、本論文は、全体にわたって先行研究が精査され、批判的考察が十分に施されたものであり、先行研究に対する知見の深さを求める本専攻の審査基準第3項を十分に満たしていると判定する。

④結論に至る論理の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

本論文は、同時代の資料や中島敦の手帳、書簡、日記のほか、蔵書目録を手がかりに中島が影響を受けたと推測される作家や思想家の著作を考察の対象としたことで、結論へと至る論理展開が十分な根拠によって支えられ、説得力をもつものとなっている。さらに、そのような外在的資料を参照しながらも、一貫して個別の作品を内在的に読み解くことに考察の主眼が置かれており、文学作品の内と外を巧みに縫い合わせながら展開する叙述は、高度な論理性をもつものといえる。したがって、論理的な一貫性を求める本専攻の審査基準第4項を十分に満たしていると判定する。

⑤当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

従来の中島敦研究は作品と原典との対照研究や、人間の生の存在論的不安、或いは人間と運命との関係の絶対性を指摘するものが多く、作品の芸術的象徴性が強調される一方、中島の時代に対する思考と作品との関係が軽視される傾向がみられた。それに対して本論文は中島の作品を丹念に解読したうえで、同時代の資料を援用し、作品の生成する背景を明らかにしただけでなく、中島の書簡や日記、交遊関係なども考察の視野に入れることで、実証的に作品の分析を行った。その結果、中島の作品、特に古典に題材を採った作品の読みの地平を大きく更新させ、作家が「古典」の枠組みを巧みに用いながら、極めて時代性に富むメッセージを発信し続けた作家であることを明らかにした。特に、子路を主人公とする「弟子」を論じた第六章において、これまで強い意志を持って己を貫徹したがゆえに悲劇の死を遂げたと解読されてきた子路像が、太平洋戦争勃発直後の日本国家の像と重なっていることを指摘し、「十二月八日」が当時の知識人に与えた衝撃の大きさが、この作品において余すところ無く現れているという指摘は、小説「弟子」が中島の戦争に対する思考の転回点であると同時に、その前後の作品世界の質を大きく分ける位置にある重要な作品であることを明らかにする内容であり、極めて示唆に富む新視点を提示したものである。

以上述べてきたように、趙楊氏は中島敦の文学作品を戦時下の文脈の中に向けて歴史化するという、一貫した研究姿勢を堅持しており、その成果であるこれら一連の論考によって、新たな研究段階へと踏み込み得たものと言ってよい。本論文が中島敦研究に新たに付加した知見は、今後の研究の展開に裨益するところが大きい。審査委員会による慎重かつ厳正な審査の結果、本研究が博士（言語文化学）の学位に値するものと判断するものである。